



学びのAviation 都立産技高専 科学技術展示館を見る

↑メイン校舎を正面から見る。
右手前は科学技術展示館。

南千住は下町エリアだが駅の東は高層マンションが建ち、墨田川が流れる。近くには汐入公園があり緑多い場所だ。東京都立産業技術高等専門学校（通称：産技高専）荒川キャンパスはこの一角にあり、併設された科学技術展示館に航空関連の展示物が収蔵されている。

工業技術の高度な専門教育を提供するために設立された学校で、2006年に開校した。前身の東京都立航空高専は日本唯一の航空関連学科がある高専であった。同キャンパスの航空宇宙工学以外には情報通信、ロボット、医療福祉の各工学分野において、学生たちは実習やプロジェクトを通じて、即戦力となるスキルを磨いている。メイン校舎は、3翅プロペラの形状をしている。1993年には、デルタ翼型をした1,235㎡の科学技術展示館が開館し、2025年度は8回の一般公開日が設定されている。

階上から展示館内部全景を見る。手前はSA-300、左はF-86D。



●航空機、ヘリコプターとエンジンの展示

展示館では、航空機に関する貴重な展示が行なわれており、展示される9機の航空機、5機のヘリコプター、14基のエンジンのうちの一部は、戦後航空再開時の国産航空機群として重要航空遺産に認定されている。これらの航空機やエンジンは、過去の航空技術を象徴するものであり、技術の進化を知ううえで貴重な資料となっている。

重要航空遺産に認定された機体とエンジンは、遺産群として国内でもっとも多く展示されている場所になる。東洋航空TT-10、フレッチャーFD-25AおよびB、読売Y-1や自由航空研究所のラムジェットJHX-3ヘリコプター、瓦斯電「神風」エンジンが揃っている。ほかにも、館内中央部にはノースアメリカンF-86Dや自作機として複製のストルブSA-300スターダスターターや円形の操縦桿が珍しいパイパーPA-22トライ

ヒューキ おもちゃ箱

第72話 北島幸司 Text & Photos: Koji KITAJIMA

ペーサーなどが所狭しと館内を埋めている。

各機体は比較的小型のものが多く、機内は狭い。機内が広く、乗員数が多い機体として、あさま山荘事件でも使用されたヘリコプター、ベル204Bがある。わが国で本格的な量産が行なわれた唯一の軽飛行機の富士重工FA-200-180エアロスバルは航空大学校で使用された機体だ。

館内は、学生が製作したレーシングカーやロボット、人工衛星模型なども置かれ、航空宇宙の宝物館に思えるような素晴らしい場所だった。石原元都知事は、ヘリコプターにて校舎屋上から来校し、レーシングカーにサインして帰ったのだという。

●航空宇宙工学コースと航空技術者育成プログラム
航空宇宙工学コースでの実際に行なわれる実習やプロジェクトは、学生たちの技術力を高め、航空業界で活躍するための基盤を作る重要なステップとなる。2年生以上の選抜学生に向けた航空技術者育成プログラムは、セスナ172PスカイホークⅡの実機を使用した実習や構造学の学習で、学生が実際の航空機設計の基本を学ぶための重要な要素となっている。そのための専用棟が整備され、航空実習館「汐風」と命名されていた。



汐風内部。YS-11メインギアの奥にセスナ172Pが見える。

さらに、超音速の流れの研究や、翼の振動試験に必要なセンサー付きのFA-200など、実験設備が揃っており、学生たちは理論と実践を通じて、航空技術の高度な理解を深めている。

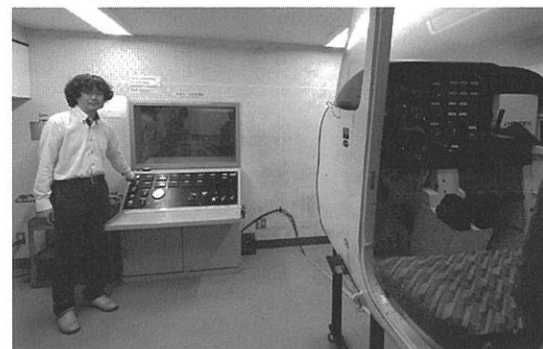
●実習施設とシミュレーション

草谷大郎准教授、宇田川真介准教授が施設を案内してくれた。校舎内にはセスナ172Pのフライトシミュレーターも用意されている。このシミュレーターでは、学生たちは航空機の操作方法や飛行理論を学びながら、実際のフライトに近い体験をすることができる。

さらに風洞実験施設も完備されており、航空機の空力性能を実験的に検証することができる。この施設で



草谷先生（奥右から3人目）の指導でセスナのシミュレーターを学ぶ。



宇田川先生はエンジンテストセルを見せてくれた。

は、学生たちが空気の流れや風圧を直接観察し、設計した航空機や翼の性能をシミュレーションできる。

●クラブ活動と鳥人間コンテスト

クラブ活動においては、学生たちは鳥人間コンテストに挑戦し、実際に競技に参加して優れた成果をあげている。2019年にはベストバードマン賞を受賞し、滑空部門で最高3位を達成するなど、航空技術への情熱が結実している。

顧問を務める山田裕一館長などの指導のもとで、チームワークや問題解決能力を養い、実践的な技術力を磨く機会となっている。取材日は、諏訪正典准教授の指導で、パイロットに選ばれた橋村葉乃子さんが翼を装備した自転車トレーニング中であった。ほかには高専ロボコンで成績を残している学生もいる。

●著名な卒業生と活躍の場

前身の都立航空高専の卒業生は、航空技術者としての道を歩む人が多く、そのなかには岐阜かかみがはら航空宇宙博物館館長や成田の航空科学博物館館長など、著名な人物も含まれている。彼らは、学び舎での経験を活かして、航空分野でのリーダーとして活躍している。さらに、ホンダの元F1チーフエンジニアである後藤 治さんも卒業生であり、世界の舞台でその技術力を発揮している。

●学外活動とグローバルな交流

学生は、シンガポールでのグローバルコミュニケーションや、シアトルで卒業生の社員の案内で巡る

ボーイング社見学などの国際的な交流プログラムに選抜により参加が可能で、海外での研修や学びを通じて、グローバルな視野を養うことができる。さらに、名古屋地区での工場見学などの機会を通じて、航空業界の最前線を学びながら、技術者としての知識を深めている。



諏訪先生（左）の指導で橋本さん（左からふたり目）がパイロットを務める。

●山田館長に聞く

同館館長でもある航空宇宙工学コースの山田裕一教授に話を聞いた。昨今は機械離れで理系志望が減るなか、航空志望者は一定数いるとのこと。「いまの学生は、工学系でも油まみれの姿ではなく、恰好よさや航空機体の外面のスタイルに興味の対象が向いている傾向があります」と説明してくれた。校舎敷地の話では、至便な都内の緑多い環境に満足しながらも、「エンジンを持ちながら、住宅地にあることから実際に運転することができないのはさみしいですね」とも聞かせてくれた。



SA-300の前の山田館長。

●進学先と将来の展望

都立産技高専の卒業生は、5年の履修の後、東大や都立大学、長岡技術科学大学など、4年制大学に進学し、さらに高度な学問を追求することができる。三菱重工やエアライン系整備会社などの大手企業に就職し、航空機や輸送機器メーカー、重工業などの分野で活躍している。航空技術者としてのキャリアを築くため、より優れた土台が提供されており、理想の環境を垣間見ることができた。

※一般開放日情報は、「科学技術展示館」で検索。